

- 1 派遣期日 令和元年 11 月 23 日（土）
- 2 研修先 学校名 筑波大学附属小学校
所在地 東京都文京区大塚 3-2 9-1
<http://www.elementary-s.tsukuba.ac.jp/>

3 研修内容

（1）視察先における研究への取組

今回視察したのは「日本授業 UD 学会」が主催した「第 5 回日本 UD 学会全国大会」である。日本 UD 学会は、本来、授業で研究していた「わかる・できる」授業作りを再考するとともに、特別支援教育の考え方を生かすことで、クラス全員のこどもたちが、楽しく学び合い「わかる・できる」授業をつくることを目指している。

研究テーマ：多様な学び方が生きる「深い学び」

（2）基調提案

教育の理念（教育の哲学）として、「発達障害の可能性のある子を含めて、全ての子が楽しく学び合い「わかる・できる」ことを目指す通常学級における授業づくり」を掲げている。子どもは「多様な学び方」で学んでいる。今までは、協同性の中で多様化が排除される傾向があったかもしれないが、実は逆で「協同性が担保されているからこそ、実は多様性が生きる」といったクラスや学校のあり方を重視すべきだと考えられる。

「多様な学び方」に適した学びとは

個別の学び（選択・最適化・自己調整） ↑ ↓	→「多様な学び方」を「選択」できる学習環境で、学びを「最適化」するからこそ「自己調整」しながら学びが深くなる。
協同の学び（包括・立ち止まり・共有）	→「多様な学び方」を「包括」する中で、「立ち止まり」をつくるからこそ、「共有」しながら学びが深くなる。

（3）公開授業

① 第 3 学年国語科 単元名 説明文の「読み取り方」を身に付けよう

『多様な考え・多様な学び方』を生かすための土台づくり ～典型教材で国語科の見方・考え方を育てていく～を研究主題とした授業であった。本時の授業で使われた教材は「言葉で遊ぼう（光村図書 3 年上）」であるが、そのような典型的な説明文を読むことで説明文の読み方を身に付け、他の説明文も読めるようになることを目指したものであった。

単元の目標は、「筆者の書きぶりの良さを考えることができる」で、3つの「読みのレベル」を意識し、「確認読み」を基盤に、「解釈読み」「評価読み」をしていくことで、筆者の書きぶりのよさを価値づけしながら読ませていた。「確認読み」の場面では、プリント裏面に総ルビの教材文を用意しておき、自分で選択して読めるような配慮がなされていた。「解釈読み」の場面では、問い役と答え役を分担し音読することで問いと答えの呼応関係を考えられるようにしたり、黒板に示した序論・本論・結論の関係図を指差しながら確認したりする等の工夫がなされていた。「解釈・評価読み」の場面では、2つ目の問いの文は必要かを問いかけることで児童の思考の焦点化を図っていた。児童の発言から筆者の書いた意図に迫れ、書きぶりの良さについて考えられたことが感じ取れた。



〈板書構成〉

② 第2学年音楽科 題材名 音楽の聴きどころは？

「鑑賞の授業において、『多様な学び方』とは何か。またどのように展開することができるか。『体を動かす活動』を切り口にして探る」が研究主題の授業である。本時の目標は「主に音色やリズムの面白さに気を付けて聴き、音楽の全体的な構成に気付く」であった。どの音楽にも「聴きどころ」があり、その音楽の「何」に焦点を当てて聴くかで、聴き方も変わってくる。どの子も同じものに気を付けて聴こうとするから、一定の聴き方、学力につながる。一斉に机に向かってじっと耳を傾ける授業と併用して「体を動かす活動」を取り入れることで、この「聴きどころ」をどの子にも楽しく、どの子にも聴きとれるようにするという課題に迫ることを提案した授業である。

本時の授業は「ゆかいな時計（ルロイ・アンダソン作曲）」の鑑賞で、3つの「聴きどころ」が設定されていた。1つ目はウッドブロックで表現される時計の秒針の音、2つ目は、目覚まし時計のベルが鳴る場面、3つ目は音楽の最後に時計が壊れてしまう音が鳴る場面である。それぞれの「聴きどころ」に合わせて楽曲を区切って鑑賞していた。

1つ目の「聴きどころ」では、「時計の音楽」であることだけを知らせて出だしの4秒だけを聴かせ、「どのあたりが時計か」と問いかけた。児童からは様々な発言が出たが、そのうちの一つに「それは何の楽器かな」とまた問いかけることで、さらに音色を意識して聴くことができた。「楽器名は分からなかったらやるまねでもいい」と、それぞれのこれまでの経験に応じてだれもが参加できるような工夫がされていた。ウッドブロックだと確認した後、ウッドブロックの音がしたら起立してそのリズムに合わせて演奏のまねをした。まねをすることでリズムを意識して聴くことができ、途中でリズムが変わることも捉えやすく、シンコペーションのリズムの特徴や面白さにも気が付きやすくなっていた。また、立ったり座ったりしたことで同じ旋律が繰り返し出てきているということに気が付き、曲全体の構成を捉えることもできた。黒板に時間の流れを表し、そこに楽器のイラストを掲示する等、視覚的にも構成が捉えやすい工夫がされていた。

2つ目の「聴きどころ」では、聴き終わると同時に教師の発問を待たず、ほぼ全員が挙手をした。目覚まし時計を表すベルの音が聴き取りやすいということもあるが、それまでの活動の中で何に注目して聴けばよいのかということが分かり、一定の聴き方ができていたと考えられる。

3つ目の「聴きどころ」では、「最後はどうなると思う」と問いかけ、子どもたちに予想させた。「繰り返す」「最初の4秒に戻る」等の構成に関わる考えや「二つの部分が合わさる」「楽器が加わる」等の音色に関わる考えが出された。このことから、本時の授業で学習した聴き方が身に付いてきたことが窺えた。最後に、それまでの学習を振り返りながら、楽曲全部を通して聴いたが、リズムがうまく取れない人は教師のまねをするように助言する等の配慮もされていた。



〈板書構成〉

4 感想

国語の授業では典型教材を読むことで説明文の読み方を身に付けること、音楽の授業では教材曲を聴くことで楽曲の聴き方を身に付けることと、どちらの授業でも本時の学習を通してどんな力を身に付けたいのかが明確であった。国語では文章や言葉への着目の仕方、音楽では〔共通事項〕への着目の仕方を明示することが、多様な学び方を包括し、児童の理解を高めるために大切であることが分かった。

音楽の授業では、「からだを動かす活動」が楽曲の特徴を聴き取るのに有効だと感じた。言葉で表現することが苦手な児童が聴き取ったことや感じ取ったことを表現する際にも有効である。他にも、児童が気付いたことは必ず実際に曲を聴いて確認し、実感させることで理解につなげていたり、音楽の時間の流れを視覚化することで見通しをもって聴けるようにしていたりと様々な配慮がなされていた。ぜひ、今後の授業に生かしていきたいと思う。今回の研修ではUDと「多様な学び」の関連性が理解できたことが収穫であった。